

2020 年度日本認知症ケア学会・認知症ケア賞 功労賞



阿保 順子（あぼ じゅんこ）

NPO 法人こころ 理事長

北海道医療大学名誉教授

長野県看護大学名誉教授

【授賞理由】

阿保氏は精神看護領域における実践・教育・研究から徹底した対人理解を永年にわたり追求されてきました。認知症の人の日々の営みに自己を投入しその人が生きてきた物語を紐解くことで今を映し出すその先駆的な試みは今日における認知症ケアの理念の根源であり全人的ケアそのものといえます。

これらの活動は、認知症ケア賞（功労賞）受賞が相応しいといえます。

【略歴】

1970 年 4 月～1973 年 9 月まで	日本赤十字中央病院
1974 年 4 月～1981 年 8 月まで	厚生病院附属高等看護学院
1981 年 9 月～1993 年 3 月まで	弘前大学医療技術短期大学部看護学科非常勤講師
1993 年 4 月～2010 年 3 月まで	北海道医療大学看護福祉学部
2010 年 4 月～2014 年 3 月まで	長野県看護大学
2014 年 4 月～2018 年 3 月まで	北海道医療大学看護福祉学研究科

【活動内容等】

活動目的：

私が認知症の人々に関わり始めた 1990 年当時、彼らは痴呆性老人や痴呆性高齢者と呼ばれており、壊れていく、崩れていくというイメージで語られていた。だが、専門病棟での彼らの実際の暮らしに溶け込んでみて私が感じたのは、崩壊ではなく創造であった。人間の身体の下にある能力をフルに活用しながら自分たちの生活世界を創り上げていると確信した。

ケアの大半は、理解することから成り立つ。そこで、上記の経験を『痴呆老人が創造する世界』（2004 年 2 月 岩波書店）として上梓した（後に『認知症の人々が創造する世界』2011 年 岩波現代文庫）。実際に介護中の方々からの反響が大きかったため、機会をとらえて、認知症の人々の「理解」を中心に彼らの暮らしぶりを伝えてきた。現在は、ひとり歩き（徘徊）の研究を行っている。

こうした、分からないことを考え、研究する一方、分かっていることを人々に伝えていくことを活動目的としている。

活動の特徴：

本も講演も、認知症の人々の暮らしの中の会話や他者との関係、諸行動を素材にして語っている。解釈は、主に人類学的な視点から行っているが、私生活での長期間にわたる高齢者との生活経験も一つの視点になっている。同時に、人間の身体（しんたい）という心と体を分けて考える心身二元論を超えた心身一如のような観点からの身体の捉え方も解釈の源流になっている。

そうした「人間理解」を根本に据えた認知症の人々の理解が、調査研究と講演活動の基盤にあるのが特徴である。

活動の効果・影響：

直接的な影響としては以下があげられる。

＊介護にあたってきた家族、介護者から、「理由がわかったことで自分の気持ちが変わ化した。」「気持ちが楽になったら妻（認知症）の表情がよくなってきた」という感想、「このような状態についてどう考えたらいいのか」「徘徊をどうしたらいいか」の相談等々、多くのお手紙をいただいた。全てにではないが、可能な限りお応えしてきた。

＊認知症関連研究で、数多く引用されている。

＊本の書評や紹介が、中央紙 4 紙に掲載され、多くの人々に関心を持ってもらえたと思われる。

今後の活動予定：

ひとり歩きの研究を続けることと、人間理解を基盤にした認知症の人々の理解について、機会を見つけて発信していくつもりである。